

大学院入試形態の変化と受験生の意識に関する社会学的考察

——面接だけで受験できる東大京大早慶などの有名校の事例を中心に

赤田達也（早稲田大学大学院）

序 本研究の課題

文部省の大学院の拡充政策により、大学院は激増した。質的レベルの問題、定員割れの問題など、大学院をめぐる諸問題が横たわっている。大学院改革に関する先行研究では、制度面などの大きな流れについての研究はあるが、現場の生の実態は研究されていない。

私は研究の傍ら、東京の高円寺の大学編入・大学院受験予備校の老舗で、業界最大手である学校法人羽場学園専修学校中央ゼミナールにおいて大学院受験指導を行い、社会学、経営学、政策系、IT、人類学、地域研究、比較文化、環境など多岐に渡る分野へ250人程の合格者を生み出して来た。

そこで本発表では、大学院受験予備校でのフィールドワークを交え、大学院受験の変化、受験生の意識を考察し、現在の大学院、今後の大学院について考えたい。

1章 大学院受験形態の変化

一昔前の大学院受験と言えば、学部でしっかり研究した勉強マニアが、さらにマニアックに学的真理を追究するために大学院に進学することが当たり前であった。入試科目は外国語の和訳と難解な専門科目、研究計画書を中心とした面接であった。しかし現在、面接だけで入れる大学院、英語がなく論文(専門か小論文)と面接の大学院、なども増加中し、入試の省エネ化が進行中である。

旧帝国大学などの難関国立大学、早稲田、慶應、上智、MARCH(明治、青山学院、立教、中央、法政)、関関同立(関西、関西学院、同志社、立命館)などの有名校において、入試の多様化が進んでいる。

意外なことに、入試科目の省力化は難関

校で進み、日東駒専、産近甲龍、などの中堅校では、おおむねしっかりと筆記試験がある。何らかの形で面接だけで受験できる入試形態がある大学院研究科としては、以下のようなところがある。

東京大学大学院新領域創成科学研究科、京都大学大学院経営管理教育部、北海道大学大学院経済学研究科、北海道大学公共政策大学院、東北大学大学院経済学研究科、名古屋大学大学院法学研究科、九州大学大学院法学府、九州大学大学院経済学府、一橋大学大学院社会学研究科、一橋大学大学院商学研究科、一橋大学大学院経済学研究科、一橋大学大学院法学研究科、一橋大学大学院言語社会研究科、一橋大学大学院国際企業戦略研究科、東京工業大学大学院社会理工学研究科、東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科、早稲田大学大学院政治学研究科、早稲田大学大学院公共経営研究科、早稲田大学大学院情報生産システム研究科、早稲田大学大学院国際情報通信研究科、早稲田大学大学院ファイナンス研究科、早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科、早稲田大学大学院教職研究科、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科、慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント研究科、慶應義塾大学大学院経済学研究科、慶應義塾大学大学院商学研究科、上智大学大学院地球環境学研究科、上智大学大学院文学研究科など。(一切英語不要で面接だけの形態、TOEFL, TOEICの提出が必要な形態、社会人は面接だけの形態、書類審査が通れば面接だけの形態など。文系、文理融合研究科に限る。学内推薦は除く。ロースクールも除く。修士課程のみ。)

2章 大学院受験生の意識の変化

大学院に近ごろ進学する人々を類型化すると、①学者志望系、②資格取得系、③生きがい趣味系、④ステップアップ系になる。

①は、研究一筋の人生を目指して大学院で研鑽を積もうというタイプ。②は、臨床心理士、税理士試験の科目免除、教員免許取得などを目的とするタイプ。③は、自分の仕事や趣味といったライフワークを学術的に見つめ直すタイプ。④は、立身出世のために、より詳しい専門知識を身につける実務系の大学院への進学や、仕事でレベルアップするために有名校出身の経歴を身につけることや、大学受験で満たされなかった思いを大学院受験で果たし、最終学歴を塗り替えることなどを目指すいわゆる学歴ロンダリングなどのタイプである。

中央ゼミナールの事例では、①②もコンスタントにいるが、③④が増加中である。①の場合も、研究者養成に強い大学院に合格できなければ、ブランド大学の実務系などどこかの研究科を併願をする傾向が強い。また、どのパターンでも、せっかくならば、ネームバリューのある大学院への進学を希望する人が多い。

研究したいことがあり、それに合う大学院を受験するというのが従来であったが、受験科目によって、研究内容を決めるケースが増えている。例えば、面接だけ、あるいは小論文と面接だけの大学院にターゲットをしばったならば、受験先に合わせて研究テーマを変えて複数系統の受験をするケースは珍しくない。

例えば、環境問題に関心があることにしたならば、政策系大学院では、環境NPOと行政の連携を研究テーマとし、IT系大学院ではネットワークコミュニティを活用した環境NPOをテーマにし、ファイナンス系大学院では環境NPOの資金調達をテーマにするといった具合である。

大学受験の際に、英語・国語・社会を勉強していたら、文学部、法学部、経済学部などを併願することは多々あるが、大学院も入試科目で選ぶようになっているのである。とにかく名のあるところであることで越したことはないという意識が強く、入試科目は少ないところがあれば、うれしいという意識が強い。大学院の記号化とでも言うべき現象である。しっかりと筆記があるところも受けつつ、省エネで受けられる有名校も併願するケースが多い。

結 本研究からの示唆

大学院が量的に増加したものの、供給過多で、定員割れも恒常化しており、大学院は入りやすくなっている。学歴社会の最高位である大学院が、実は最も合格チャンスが大きいというパラドックがある。

受験生としては、大学受験の失敗により、ハビトゥスが合わない大学で鬱々とした気持ちで4年間過ごしても、大学院受験でハビトゥスが合うところに移っていきいきして、学歴社会における癒しと救いを得やすくなっている。幸福を感じる人が現実が増えてきているが、大学院の質的維持の問題も同時に生じる。

大学院の受験生確保と質的水準の維持の両立は非常に難しい問題であるが、大学院受験人口の増加が、日本の大学院の底上げにつながるため、大学院は勉強マニアだけが行くところであるという世間の誤解を解きつつ、受験人口を増やすことが必要不可欠であろう。

参考文献

- 赤田達也 2008「50歳からの大学院受験マニュアル——生きがいの探求から学歴の塗り替えまで 面接だけでOK!の大学院リスト付き」『月刊現代』2008年4月号講談社 p 66-75